

# 生活福祉の創造をめざして

—介護福祉専攻学生の家政系科目に関するアンケートから—

## On a Creation of Living Welfare

— Through the Questionnaire Survey of the Students Majoring in Welfare Caretaker  
on the Studies of Home Economics —

赤 根 由 利 子  
Yuriko AKANE

金 子 信 子  
Nobuko KANEKO

## 1. はじめに

「社会福祉士及び介護福祉士法」では、介護福祉士の仕事は、「専門的知識及び技術をもって、身体上又は精神上の障害があることにより日常生活を営むのに支障がある者につき入浴，排せつ，食事その他の介護を行い，並びにその者及びその介護者に対して介護に関する指導を行うことを業とする者」とされている。その役割は，生活を支えて本人の機能を最大限発揮できるようにする点にあり，介護福祉職に期待されるのは，要介護者の意思を汲みいれた生活の自立支援である。

2007年11月に20年ぶりに社会福祉士及び介護福祉士法の一部が改正され，「入浴，排せつ，食事その他の介護」から「心身の状況に応じた介護」に改められるなど，一人ひとりの心身の状況に応じた介護が志向されるようになった。これからは更に個別的ニーズに即した対応や援助ができる生活支援能力が必要となり，生活の質を高める支援が求められる。

介護福祉士養成教育では，家政系科目は「家政学概論」と「家政学実習」が必修科目としておかれている。家政学は，家庭生活を中心とした人間生活における人と環境との相互作用について，人的・物的両面から自然・社会・人文の諸科学を基盤として研究し，生活の向上とともに人類の福祉に貢献する実践的総合科学である。1998年に日本家政学会が著した「日本人の生活」の中で，天野寛子は，「自立を基本とした生活力」として生活力を自立の種類により3つの面から分け，その具体的能力の内容を述べている。<sup>1)</sup>

言うまでもないが，私達の生活を根底で支えているのは，衣食住を中心とする日常活動の繰り返しであり，家庭生活は，日常生活の基盤である。私達は生活の基本単位である家族や地域の人々との関わりの中で個別のライフスタイルを持ち，生きがいを持って自分らしい生活を送りたいと願っている。

家政系科目は多様な専門分野からなり，幅広い内容を含んでいる。これまでも，授業時間の制約下で，学生が生活支援に必要な知識や技術を習得し，介護現場での実践力につながる内容となるよう検討してきた。しかし，学生は生活経験に乏しく，基礎的な生活技能も不足しており，また，福祉的視点に立つ家政学もその教育内容や方法等が不十分である等，検討事項が多数あるため，教育成果が現場の実践力に反映できていない点がある。

そこで本稿では，介護実習で，さまざまな心身の特性をもつ利用者の生活支援を経験し，学外実習を終了した2年生を対象に授業内容に関する意識調査を行い，現行の家政系科目の授業内容について検討を行った。また，学生が既習の家庭科教育は家政学と一体関係にあるので，介護福祉士養成課程に学ぶ1・2年生に「家庭生活についての調査」<sup>2)</sup>を行い，生活体験の実態や意識調査から学生の生活能力を検討した。この調査は，日本家庭科教育学会が，家庭科教育が「生きる力を育てる」教科として真の効果をあげているかどうかを検証するために実施した調査（2001年）をもとに行ったものである。「生きる力」は自立生活能力や「生活力」の基礎となるものである。今回実施したこれらの調査は，現場での実践力養成につながる，家政系教育の授業の課題を探る

ための基礎資料とするために行った。

## 2. 調査の結果と考察

### 1) 家政系科目（家政学概論・家政学実習）の教育内容に対する検討

学外実習を終了した、福祉専攻2年生に調査を実施した。家政系科目のうち、調理実習については受講中であった。

(1) 調査対象・調査時期：人間生活学科人間福祉専攻2年生の35人（男4人，女31人）を対象に，最後の学外実習である第3段階終了直後の2007年12月に実施した。

(2) 調査方法：厚生省（現厚生労働省）通知に示されている内容と先行研究<sup>3)</sup>，さらに介護現場の実践力につながる内容を盛り込んで行ってきた授業内容をもとに，表1に示した30の調査項目を設定した。そして，家政学や家政学実習で学んだ知識や技術が，介護現場における実習で，どの程度勉強しておいて良かったかを問う質問紙調査を実施した。評価は，「とても良かったと思う」「少し良かったと思う」「どちらともいえない」「あまり良かったと思わない」「まったく良かったと思わない」の中から1つを選択する5段階評価で行った。また，「授業で勉強しておきたかったこと」についての自由記述を求めた。回収率は100%であった。

表1は，各項目を「とても良かった」を5点とし，「まったく良かったと思わない」までを1点として評価した平均値の結果であり，図1は各項目の評価の人数割合である。表1より，30項目中，4.0以上で評価が高かった項目は，「高齢者・障害者の着脱しやすい衣服の工夫をする」「高齢者や障害者が食べやすい形態の調理手法を知る」「食事の意義を考える」「生活習慣病と食生活の関係を知る」「いろいろな食品の特性を知り，安全な食品を選ぶことができる」「車イスの使える住環境の条件を知る」であった。また，一番評価が低かった項目は，平均値3.2の「消費者保護行政について知識を得る」であった。また，図1より，30項目において「まったく良かったと思わない」と答えた者が2人のみであり，「とても良かったと思う」「少し良かったと思う」と答えた者は4項目（「消費者保護行政について知識を得る」32%，「自分の生活時間の特徴を知る」46%等）を除く26項目において50%以上を占めた。その中でも，「高齢者・障害者の心身の変化と生活の特性を知る」と「生活習慣病と食生活の関係を知る」の項目は80%以上となった。分野別にみると，食分野の評価が高かった。また，自由記述については，内容を記載した学生は6人のみであり，縫製技術の習得（2人），衣服の洗濯（1人），料理（2人），車椅子の清掃方法（1人）であった。全体的には，予想していたより良い評価であったので，家政学概論や家政学実習のこれらの授業内容は，介護現場での生活支援に生かされたと思われる。しかし「とても良かったと思う」という評価を得るためには，福祉や介護の現場を想定し，福祉や介護にかかわる実践的授業内容の精選や，授業での学生の意欲を高めるための授業方法の工夫がなお一層必要になると考えられる。

表1 家政系科目授業内容の項目別に対する評価結果（その1）

(N=35)

	調査項目	平均値	標準偏差
1	家族と家庭生活の意義を考える	3.7	0.82
2	高齢者・障害者の心身の変化と生活の特性を知る	3.9	0.59
3	高齢者の生きた時代の歴史を学ぶ	3.8	0.76
4	自分の生活時間の特徴を知る	3.4	0.81
5	消費者保護行政についての知識を得る	3.2	0.84
6	食事の意義を考える	4.0	0.86
7	現代の食生活の問題点を考える	3.9	0.68
8	栄養素の働きを知る	3.9	0.77
9	栄養素による分類を知り、代謝や消化吸収の仕組みを知る	3.8	0.68
10	高齢者や障害者の栄養と食生活の特徴を知る	3.9	0.76
11	生活習慣病と食生活の関係を知る	4.0	0.70
12	いろいろな食品の特性を知り、安全な食品を選ぶことができる	4.0	0.66
13	高齢者や障害者が食べやすい形態の調理手法を知る	4.1	0.83
14	高齢者や障害者のための1人分の食事をつくる	3.9	0.81
15	咀嚼・嚥下困難者のための食事や軟菜食をつくる	3.9	0.91

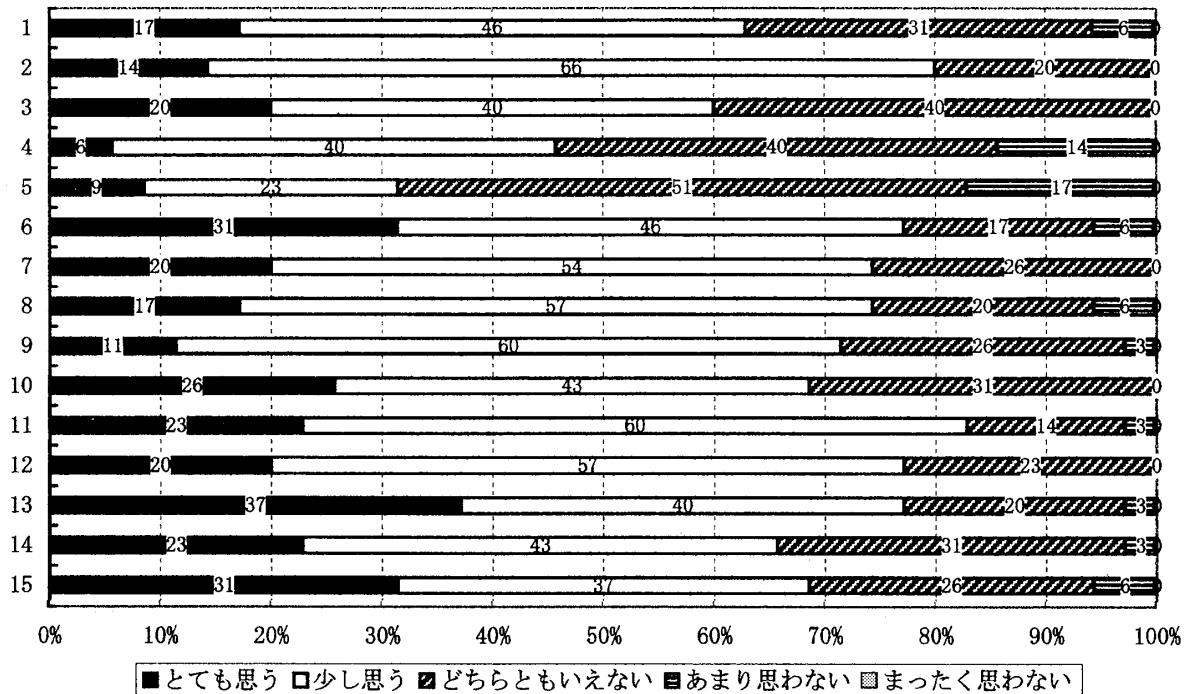


図1 家政系科目授業内容の項目別に対する評価結果（その1）（人数割合）

表1 家政系科目授業内容の項目別に対する評価結果（その2）

(N=35)

	調査項目	平均値	標準偏差
16	繊維の取扱い表示を知る	3.6	0.88
17	布地や衣服の特性にあわせた洗濯について知り、漂白・しみぬきの知識を得る	3.7	0.83
18	高齢者や障害者に対応した被服デザインの配慮事項を知る	3.8	0.83
19	高齢者にとってのおしゃれの効用を知る	3.7	0.80
20	衣服の特性にあわせて、衣服の手洗いや洗濯を行う	3.6	0.88
21	ボタン付け・ほころび直しなど基本的な裁縫技術を学ぶ	3.6	0.77
22	枕カバーなど簡単な袋物が手で縫える	3.5	0.81
23	日常着の丈詰めなど、簡単なリフォームを行う	3.5	0.85
24	高齢者・障害者の着脱しやすい衣服の工夫をする	4.1	0.76
25	高齢者に適した快適な室内環境（採光・温湿度・換気・インテリア）について知る	3.9	0.83
26	清掃用具・清掃用洗剤の使い方を知る	3.6	0.88
27	地震や火事の際の安全対策や避難方法を知る	3.8	0.88
28	車イスの使える住環境の条件を知る	4.0	0.84
29	高齢者や障害者に配慮した住宅の条件について知る	3.9	0.76
30	介護保険を利用した介護機器や住宅改修について知る	3.8	0.90

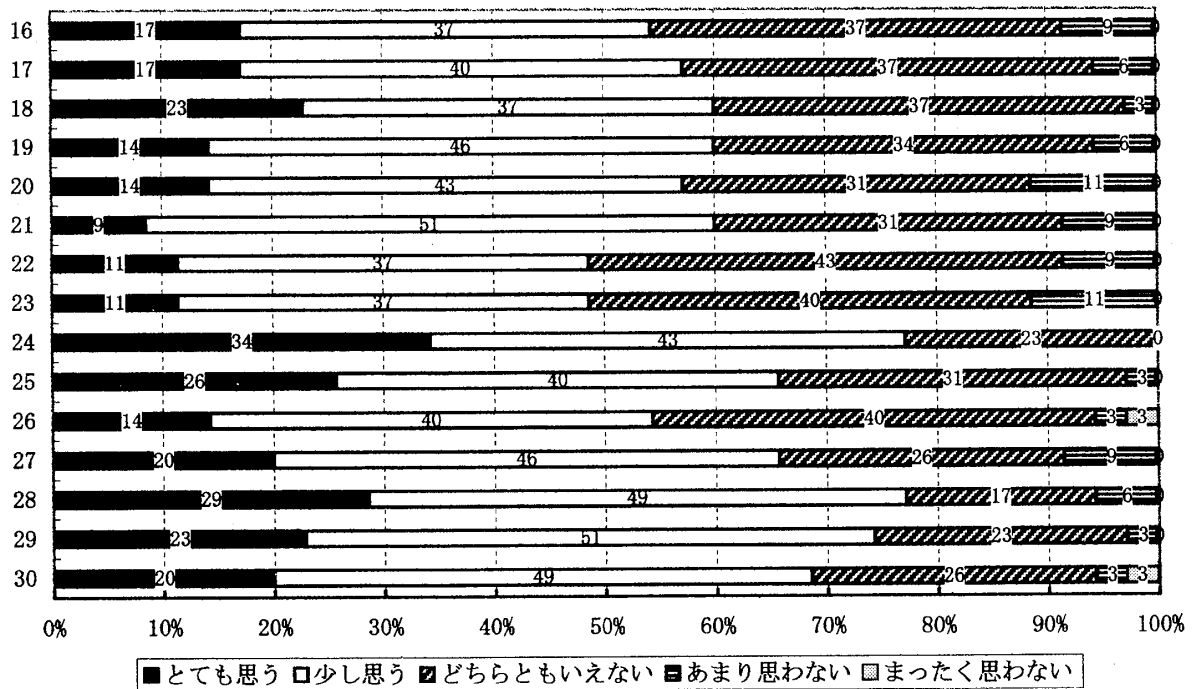


図1 家政系科目授業内容の項目別に対する評価結果（その2）（人数割合）

## 2) 「家庭生活についての調査」にもとづく学生の生活力の検討

(1) 調査対象・調査時期：人間生活学科人間福祉専攻の1年生39人（男9人，女30人），2年生30人（男4人，女26人）の計69人（男13人，女56人）を対象に2007年12月に実施した。

(2) 調査方法：日本家庭科教育学会が実施した「家庭生活についての調査」の内容の中から，①時間などの基本的な生活習慣について，②衣食住などの生活技能の実践状況，及び技能への意欲・関心，③家庭生活についての意識，の3点について，質問紙調査により検討した。回収率は100%であった。

表2-1は平日の朝，どんなふうに起きているのかを聞いた結果である。「いつも」と「たいてい」合わせた61%が一人で起きていると回答している。一方，自分で起きられないで起こしてもらっている者は「ときどき一人で起きる」を加えると39%おり，なかなか一人で起きるのが難しい者も結構いることがわかる。次に食事は誰と食べることが多いかを聞いたところ，朝食は多い順に「一人で」が51%，「食べない」が19%，「家族みんなで」が16%，「誰かと」が14%となった。また夕食については「家族みんなで」が41%，「一人で」30%，「誰かと」が20%であった。この結果から，朝食においては半数の者が一人で食べ，これに朝食を食べない者を合わせると70%となった。夕食は61%の者が家族一緒かまたは誰かと食べていると回答しているが，夕食においても3割の者が一人で食べていると言う結果である。家政学の授業演習において，詳細な生活時間調べを行い自己の生活の振り返りをしているが，その調査からも，学校での授業時間以外は自分だけの自由な生活を過ごしている者が多い。この調査からも基本的な生活習慣が整っていない様子がみてとれた。

表2-2と図2は，ふだんどの程度やっているか，やっていないかという衣食住に関する生活技能の実践結果である。表2-2は，各項目を「いつもする」を4点とし，「しない」までを1点として評価した平均値で，図2は各項目の評価の人数割合である。まず表2-2の平均値をみると，14項目中一番実践していたのは3.7の「季節や気候にあった服装を自分で決める」で，次は3.0の「過ごしやすくなるように，部屋の温度や空気を調節する」と「近所の人に挨拶する」であった。また低かった項目は2.2の「ボタンのとれた時に，ボタンをつける」，次いで「家族の夕食を作る」であった。次に図2について，分野ごとの各項目についてみると，まず食につい

表2-1 朝起きるとき

(N=69)

	調査項目	人数	(%)
1	いつも一人で起きる	32	46
2	たいてい一人で起きる	10	15
3	ときどき一人で起きる	6	9
4	たいてい起こしてもらう	14	20
5	いつも起こしてもらう	7	10

表 2-2 衣食住などの生活実践

(N=69)

	調査項目	平均値	標準偏差
1	フライパンや鍋を使って料理する	2.7	0.84
2	家族の夕食を作る	2.2	0.95
3	洗濯機で衣服の洗濯をする	2.7	1.08
4	洗濯物をたたむ	2.8	0.94
5	ボタンのとれた時に、ボタンをつける	2.2	1.06
6	季節や気候にあった服装を自分で決める	3.7	0.64
7	部屋を掃除してきれいにする	2.9	0.86
8	家族に頼まれた買い物をする	2.7	1.01
9	過ごしやすくなるように、部屋の温度や空気を調節する	3.0	0.86
10	ゴミを決められた方法で出す	2.9	1.11
11	電気や水を使いすぎないように、注意や工夫をする	2.8	0.98
12	近所の人に挨拶する	3.0	0.92
13	お年寄りや体の不自由な人に声をかけたり手助けをする	2.6	0.88
14	子どもの遊び相手をする	2.4	1.08

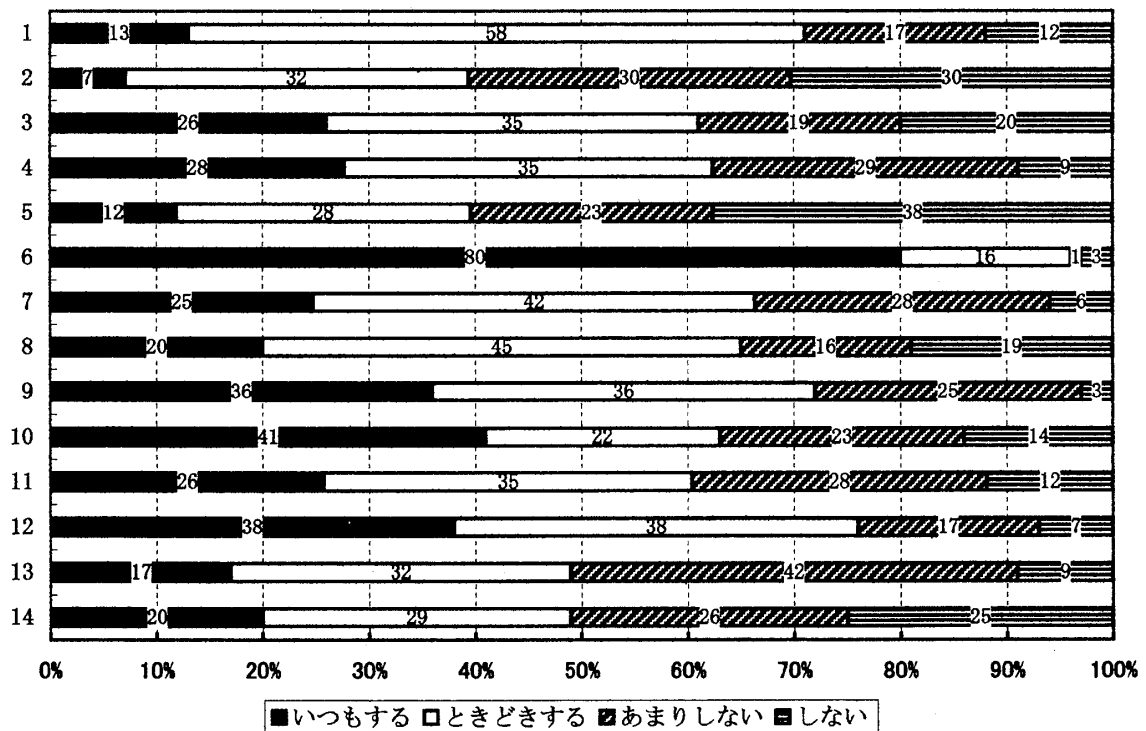


図 2 衣食住などの生活実践 (人数割合)

では、「フライパンや鍋を使って料理する」は「いつもする」が13%、「ときどきする」が58%で、いつもとときどきを合わせれば71%の実践率となった。しかし「家族の夕食を作る」の項目は「しない」や「あまりしない」を合わせると60%となり、家族と一緒に食事をする頻度が多いとは言えない状況を反映した結果となった。衣に関する実践率は、「服装を決める」ことに関してはすべての項目中一番高かったが、洗濯をしたり、たたんだりといった衣服の手入れに関する行為はさほど行われていなかった。中でもとれたボタンをつけたりする事は、家族の夕食づくりと同じくらい実践されていなかった。これらの食と衣のもっと上手にできるようになりたいという意欲・関心を尋ねたところ、自分のためになり必要だという理由で、衣に関するのこより調理への関心が高く表れていた。

次に、住や環境などの「いつもする」と「ときどきする」の実践率をみると、「部屋の温度や空気の調節をする」や「部屋の掃除をする」、「ゴミを出すこと」等、順に72%、67%、63%となり比較的实践されているという結果であった。しかし、部屋の温度や空気の調節をすることや部屋の掃除をすることは、快適で健康な生活をする上で基本の留意事項であるので、いつも実践できなければならない。

対人関係の項目である「近所の人に挨拶をする」や「お年寄りや体の不自由な人に声をかけたり手助けをする」及び「子どもの遊び相手をする」などの「いつもする」と「ときどきする」を合わせた実践率は「近所の人」が76%、「お年寄り」と「子ども」が49%で、「お年寄り」と「子ども」は「する」と「しない」に2分する結果となった。お年寄りや体の不自由な人とのかわりに対してのこの結果は意外であった。学生に、「もっとすすんでするようにしたいと思うこと」を尋ねたところ、「お年寄りや体の不自由な人に声をかけたり手助けをする」ことがあげられたので、気づいてはいるが積極的に実践することができないということであると思われる。対人関係の技能の習得が必要である。

表2-3と表2-4は、家族の意識について、学校や外から家へ帰った時の気持ちとその理由について尋ねた結果である。帰宅した時の気持ちとして「ほっとする」と答えた者が62%と多く、理由としては「ゆっくりできる」が57%、「好きなことができる」が13%であった。また家族の働きとしてなにが大切であると思うかや自分の家族に望むことについて尋ねたところ、大切なことは「家族みんなが楽しく暮らす」ことであると思うが多く（86%、複数回答）、一方それとともに、経済的な豊かさを望んでいる者が多かった（楽しく暮らす52%、お金がたくさんある49%、複数回答）。そして、家族生活を明るく楽しくするために自分にできることは「家族と話し合う」ことだと思っている者が多かった（44%）。これらのことから、家庭は外での緊張から解放されほっとできる場と思っているが、外での緊張はゆっくりとした中で自分で解消するもので、家族の存在や家族とのかわりの中で行っているのではないことがわかった。しかし、家族みんなが楽しく暮らすことが大切であるという思いや、そのために自分ができることは話し合いであるとい



表2-3 家に帰ったときの気持ち  
(N=69)

	調査項目	人数	(%)
1	うれしい	4	6
2	ほっとする	43	62
3	何も感じない	8	12
4	つまらない	5	7
5	家に入りたくない	2	3
6	わからない	2	3
7	その他	5	7

表2-4 その理由  
(N=69)

	調査項目	人数	(%)
1	家に誰かがいる	4	6
2	ゆっくりできる	39	57
3	好きなことができる	19	13
4	家に誰もいない	4	6
5	家の仕事をさせられる	0	0
6	家族がうるさい	3	4
7	家に帰るのが当たり前だから	4	6
8	わからない	5	7
9	その他	1	1

うことより、情緒的なつながりを家族に求めていることが伺える。

以上これらの調査から、基本的な生活習慣が整っておらず、生活技術等の生活能力も生活実践を通して獲得していかなければならないことが明らかとなった。情緒的なつながりを家族に求めつつも、家族とのかかわり合いも希薄となり、他者とのかかわりよりは自分中心の満足を求める傾向が強い。特に人とのつき合い能力に課題があり、対人関係に関する技能の習得が必要であると考える。人とのかかわりをもつためには、基礎的な生活技能があつて支援が可能であるので、自己の生活実践能力を高めるとともに、介護者として自立生活を支援するための対人関係の技能を習得することが大切である。

### 3. おわりに

今日、在宅サービスへの需要の増加や、在宅の暮らしに近い形でのユニットケアの普及により、一人ひとりの心身の状況や、個別的ニーズに合った生活支援の実践力が求められている。ユニットケアでは、全室個室の居室と共有スペースのリビングがあり、1つのユニットごとにキッチンや浴室、トイレなどがあつて、そこに少人数の担当の介護士がいてケアを行っている。家庭らしさを目指し、日常生活における個別援助が望まれるが、そうは言っても介護士が2人位の少人数であるので、きめ細かく個人に対応するためにも、介護士の人員の確保がしやすい環境整備が望まれる。調査結果から、今回検討した授業内容については、現場での生活支援に予想以上に生かされたと捉えることができた。家庭生活についての調査からは、学生は生活実践力に乏しく、特に対人関係を構築するための生活技能の習得が必要であつて、学生自身が自立した生活をおくる能力を身につける内容も必須であることが明らかとなった。今後は今回調査できなかった授業内容の検討を行い、学生の生活能力や援助者としての実践能力を高めるような内容を加えてさらに精選・再構築するとともに、実践意欲につながる授業方法の工夫や研究を行い、学生の生活支援能力の向上を図りたい。

## 引用文献

- 1) 天野寛子：家族と生活力，日本人の生活；50年の軌跡と21世紀の展望，建帛社14～18，1998
- 2) 日本家庭科教育学会：家庭科で育つ子どもたちの力，明治図書出版，2004
- 3) 湯川夏子他：介護福祉養成における家政系教育内容の再構築，介護福祉学，11(1)，36～52，2004

## 参考文献

- 1) 内閣府：平成19年版国民生活白書
- 2) 高等学校学習指導要領（平成11年3月）
- 3) 高等学校学習指導要領解説家庭編
- 4) 中学校学習指導要領（平成10年12月）
- 5) 中学校学習指導要領解説一技術・家庭編一
- 6) 小学校学習指導要領（平成10年12月）
- 7) 小学校学習指導要領解説家庭編
- 8) 石田一紀：介護における自立援助 介護職が生き生きと働けるために，クリエイツかもがわ出版，2006
- 9) 一番ヶ瀬康子他：改訂新・セミナー介護福祉8；家政学概論，ミネルヴァ書房，2005
- 10) 堀田剛吉他：未来思考の生活経営，家政教育者，2003